



TITLE:

# 1890年代ロシア資本主義論争における思想と経済学 (静田均教授記念号)

AUTHOR(S):

田中, 真晴

---

CITATION:

田中, 真晴. 1890年代ロシア資本主義論争における思想と経済学 (静田均教授記念号). 経済論叢 1965, 95(1): 88-112

ISSUE DATE:

1965-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/133041>

RIGHT:

# 經濟論叢

第九十五卷 第一號

## 靜田 均教授記念號

---

献 辞 .....	堀 江 英 一	
資本蓄積による構造変化 .....	岸 本 誠 二 郎	1
現代の国際通貨制度 .....	真 藤 素 一	16
アメリカセメント工業の 基準地点制について .....	越 後 和 典	31
アメリカ自動車工業の競争構造における フォード自動車会社の成長形態 .....	岡 田 賢 一	49
アメリカ石油業における近代的 精製技術の発展過程 .....	松 井 哲 夫	69
1890年代ロシア資本主義 論争における思想と経済学 .....	田 中 真 晴	88
ドイツ石炭鉱業における賃銀形態 .....	大 野 英 二	113

靜田 均 教授 略歴・著作目録

---

昭和四十年一月

京 都 大 學 經 濟 學 會

# 1890年代ロシア資本主義論争に おける思想と経済学

田 中 真 晴

## I は し が き

わたくしは前稿において1890年代のロシアにおける経済思想の動向を、ロシアにおける経済思想の展開史の一般的な特徴づけに関連させて概観した<sup>1)</sup>。しかしそのさい在野陣営の経済思想については1890年代以前で叙述がおわり、90年代のその内容は概略さえ述べるができなかった。ところで90年代における在野陣営の主要な経済思想は、ナロードニキ、合法マルクス主義、マルクス主義の3つであり、それら3つの経済思想はロシア資本主義論争において、具体的に展開された。したがって1890年におけるロシア経済思想の動向の研究は、ロシア資本主義論争の研究によってはじめて全体のかたちを整えるはずである。この意味でロシア資本主義論争を対象とする本稿および次稿は前稿の継続であるが、しかしたんなる継続ではない。前稿においては、90年代ロシアの経済思想の諸潮流をそれぞれの社会存在論的位置にしたがって類別し、それぞれの特徴を叙述する方法をとった。したがって、諸思想が現実の問題をめぐるたがいに対立し、交錯する姿は描かれなかった。ロシア資本主義論争をテーマとするときにはじめてそれが描かれうる。

他方わたくしは旧稿<sup>2)</sup>において、1890年代ロシア資本主義論争の特徴と背景を1880年代との比較において論じた。したがってそれとの関連においては、本稿および次稿は、旧稿を序説部分とするところの1890年代ロシア資本主義論争研究の本論であり、1890年代ロシアの経済思想の動向を概観した前稿は、その

1) 田中真晴、1890年代ロシアの経済思想の動向、「経済論叢」94巻2号、1964。

2) 田中真晴、1890年代ロシア資本主義論争の特徴と背景、「経済論叢」92巻5号、1963。

あいだにはさまれた中間的展望の章にはかならない<sup>3)</sup>。

## Ⅱ 飢饉の衝撃と史観論争

1891年の夏、ヨーロッパ・ロシアの中央部の21県は大凶作に見舞われ、そのうえコレラの流行も伴って、惨憺たる光景を呈した。凶作地帯の住民の数は3000万人とも4000万人ともいわれるが、翌92年にも前年の凶作地帯の1部はふたたび凶作におそわれた。この1891-92年の凶作による飢饉の衝撃は、当局にとっても、知識人にとってもひじょうなものであった<sup>4)</sup>。

当局は飢饉のためにおこりうべき騒じようと社会不安をおそれ、また鉄道建設のための外債募集に対する悪影響をおそれ、飢饉地帯のルポルタージュに対して報道管制をおこない、穀物の輸出を一時停止し、救援資金を算上し、また救援資金のための外債を募るなど、一連の緊急対策を実施した。しかし飢饉の惨禍に対してそれらはなにほどの効も奏することなく、ヴォルガ河流域地帯を彷徨する難民の群はあとを絶たなかった。飢饉当時の大蔵大臣はヴィシュネグラツキー И. А. Вышнеградский である。かれは1887年、前任者 プング Н. Х. Бунге のあとを襲って就任して以来、プングが残した財政の巨大な赤字を埋め、国際収支を改善して保有金量を殖やすことをひたすら目標とし、農民に対する重税・穀物の飢饉的輸出の強行策をとってきたのであった。飢饉はロシアの農業の疲弊をまざまざとめしめたから、ヴィシュネグラツキーに対する非難の声が当局の内外からおこり、かれは「人民の支払いの力はもはや枯渇した」

- 3) わたくしのすでに発表した、および執筆予定の諸論稿の全体の構成はつぎのとおりである。第1部、ロシア資本主義論史研究の序説を導入部とする、ブレハーノフの先駆的ロシア資本主義分析の研究（『経済叢論』89巻1号、89巻5号、90号4号、91巻3号）。第2部、1890年代ロシア資本主義論争と経済思想の動向の研究（前記注1）、2）、本稿および続稿）。第3部、ブレハーノフの経済思想体系、レーニンとの対比を中心として、『経済学史講座』第3巻、有斐閣、1965年2月刊予定、所収の論稿、ロシア資本主義論の展開、第2、第3節は上記第2部および第3部の内容の一部分をふくんでいる。
- 4) 飢饉については、本節および次節で挙げる同時代人の飢饉論のほか、A. K. Wildman, "The Russian Intelligentsia of the 1890's", A. S. E. E. R., Vol. XIX, No. 2, 1960, pp. 157-79, D. Geyer, *Lenin in der russischen Sozialdemokratie*, 1962, SS. 1-8 など。一般に西側の文献には、1890年代史の始点としての飢饉の意義を強調しているものが多い。

という言葉を残して92年夏に辞任、ヴィッテ С. Витте (在任1892-1903) がそのあとをついだ。ヴィッテは事実上すでに峠を越しつつあった飢饉のあと始末をしたのち、いわゆるヴィッテ体制の諸政策をおしすすめていったが、それは旧稿および前稿で述べたように、ヴィッテ流の解釈をほどこしたリストの経済学を支柱として、ロシアの工業化を強行するものにほかならなかった<sup>5)</sup>。

ヴィシネグラツキーからヴィッテへの蔵相の交替は、ツァーリズムの経済政策の質的転換ではなかった。ヴィッテは前任者時代の、赤字解消を第1義におく国庫政策を廃棄したけれども、かれの工業化政策は前任者、いなさらにそれ以前から基本的な政策方向として定められていたところのものを、強力に体系的に実現するものであった。しかもそれは、社会構造における前資本主義的残基を放置したままで、それを基盤としての工業化政策であった。だから、飢饉はツァーリズムに衝撃を与えたけれども、飢饉に対する抜本的な対策は講ぜられることなく、ツァーリズムの経済政策はいっそう力づよい舵手をえて、農民の負担による工業化の方向へと突っ走ることとなった。農業については当面、工業化の成功が農業を繁栄育成させると考えられたのである。

飢饉の衝撃はツァーリズム当局だけでなく、社会の各層におよんだが、とりわけ注目すべきことは、80年代にロシアの知識人層をつつんでいた政治的アパシーの黒い霧を一挙に吹きはらし、社会問題に対するいきいきとした関心呼びおこしたことである。

70年代の輝ける評論家ミハイロフスキー Н. К. Михайловский (1842-1904) も、80年代には沈滞して「ささやかな行為」の思想<sup>6)</sup>にまぎこまれていたが、飢饉によって評論家としての情熱をよびさまされ、「総督、大臣、県知事たちがロシアを破滅のふちに追いこんだのだ。いまやかれらとは異なるひとたちに訴

5) ヴィッテの経済政策および経済思想については注1) にあげた論稿およびその論稿において指摘した文献を参照。

6) ささやかな行為 *малые дела* の思想というのは、人民に対する大いなる夢をうしない、小さな改良の仕事だけが日程にのぼった、80年代後半のロシアの知識層の思想傾向をいう。G. Fischer, *Russian Liberalism*, 1958, Ch. 1, J. H. Billington, *Mikhailovsky and the Russian Populism*, 1958, pp. 147-53 を参照。

えねばならない。全国の選ばれた代表者たちの招集と、現在の状態についての自由な討議だけが、社会にみなぎっている無気力と不信感をほらいのけ、……過去にロシアをつねに救ってきた、あの自己犠牲の情熱を呼びおこすであろう」<sup>7)</sup>と書いた。かれはゼムスキー・ソボールの開催を提議したのである。かれは民主主義の要求を中核におく非合法結社「人民の権利」(Народное Право) 党のマニフェストの起草にもたずさわった<sup>8)</sup>。また、かれは新しい雑誌の刊行を飢饉のまえから計画していたのではあるけれども、かれが《Русское Богатство》誌を入手し、同誌にナロードニキ著述家たちが結集して、ナロードニキ主義思想の復活が熱っぽく試みられた背景には、飢饉の衝撃があった。90年代におけるナロードニキ主義思想の復興運動をば、マルクス主義の抬頭をおそれてのマルクス主義批判カンパニヤとしてだけみるのは誤りであろう。飢饉によって触発された、ロシア社会に対する危機意識が運動の発条としてあったのである。

飢饉の衝撃は、当時すでに50歳のミハイロフスキーたちのばあいには、かれらを惰眠から醒まさせるはたらきをしたのであるが、ストルヴェ П. Струве (1870-1944), ブルガコフ С. Н. Булгаков (1871-1944), ポトレソフ А. Н. Потресов (1869-1934), マルトフ Л. Мартов (1873-1923) など、ほぼ1870年うまれの世代にとっては、またおのずから異っていた。かれらは合法マルクス主義およびマルクス主義の代表者として活躍するひとたちであるが、飢饉のときにはかれらの大部分はなお学生であり、飢饉の鮮烈な印象はかれらの社会意識の開花をつよく彩った。ストルヴェは自伝の一節において「1891～92年の飢饉の強烈な印象が〈合法マルクス主義〉として知られるようになった、あ

7) Полное собрание сочинений Н. К. Михайловского, X, 1913, стр. 72, Billington, *op. cit.*, p. 158 から引用。

8) 「人民の権利」党は1893年夏に結成、94年4月に当局によって破産された小さな結社であるが、レーニンは、この結社を「革命的ナロードニキ主義の政治的＝急進的民主主義への転化過程における最終段階のひとつ」(『レーニン全集』第1巻, 309ページ)として評価している。80年代末～90年代初頭においても革命的ナロードニキは消滅しきったのではない。この時期における革命的ナロードニキの動向については Н. К. Каратаев, Народническая экономическая литература, 1958, стр. 72-80。

の政治的思想運動を生んだのである。わたくしは、この運動が書物からではなくて生活の感銘からうまれたという事実を強調する」<sup>9)</sup>と述べている。1870年ごろ生まれの世代のうちでほとんど唯一の例外はレーニンである。すくなくとも文献によって知られるかぎりでは、飢饉はかれに対してとくべつの意味をもたなかったようであるが、それはかれが飢饉以前にすでに革命家としての自覚を確立していたからであろうか。あるいはかれの思想的体質にもとづくのだろうか。

ブレハーノフ Г. В. Плеханов (1856-1918) は飢饉の当時、ジュネーヴにあって、「労働解放」団の理論家として活躍していた。かれは飢饉からミハイロフスキーやストルーヴェのばあいのような衝撃は受けなかった。かれは飢饉に関して入手できるだけの情報を集め、非合法冊子「全ロシアの破産」“Все-российское разорение” (1892年1月執筆) を書き、手段をつくしてそれをロシアへ送りこみ、またそれに対して寄せられた批判にこたえて「ロシアにおける飢饉との闘争における社会民主主義者の任務」“О задачах социалистов в борьбе с голодом в России” (1892) を書いたが、そこにみられるかれの立場は、飢饉によってひきおこさるべき激動を、ロシアへのマルクス主義の滲透の好機としてつかみ、ツァーリズム体制打倒の戦線を形づくろうとするところにあった(本稿Ⅲ節を参照)。

いま述べたところからも知られるように、飢饉の衝撃といってもひとによってさまざまながいがあり、それに対する対応の仕方もちろん様ではなかった。そして、飢饉に対する反応の仕方、飢饉の解釈の仕方、飢饉をふせぐべ

9) P. Struve, “My Contacts and Conflicts with Lenin”, *Slavic Review*, Vol. XII, 1934, pp. 586-86. 本文につづけて「ロシアの経済的、社会的、政治的發展についての多かれ少かれ調和的なマルクス主義的理論が、ロシアのそとで、少数の、そしてロシアとの接触をたち切られた当時の政治的亡命者のあいだで、すなわちブレハーノフとアクセルロッドの労作のなかで、すでにつくりだされてはいた。しかしこの理論は、創始者たちの輝かしい才能にもかかわらず、なんといっても亡命者サークルの産物であって、新鮮な、生きた生活の印象に結びついてはいなかった。若い世代はその印象を1891～92年の飢饉から受けとったのである」と述べている。ストルーヴェのマルクス主義との出会いおよびその吸収の仕方については、上記の自伝のほか、С. Л. Франк, Биография П. В. Струве, New York, 1956, стр. 11-29.

き政策の提起の仕方のなかに、90年代ロシアの3つの在野思想の立場と対抗の基本線が見られるのである。それには、史観を中心とする次元のものと、ロシア資本主義論そのものの次元とがあり、それらは相互に関連してはいるが、同じではない。われわれが主として問題にするのはロシア資本主義論であるが、そのまえに史観の次元におけるそれぞれの立場と対抗についてかんたんに述べなければならない。手がかりを与えてくれるのはミハイロフスキーである。

ミハイロフスキーはさきに述べたように、飢饉にさいして政治体制の民主主義的改革を提起した。その点でかれは、90年代ナロードニキの平均的水準をこえて、マルクス主義者と当面の目標を等しくしていたといえる。しかしミハイロフスキーは飢饉を契機として、マルクス批判者として立ちあらわれることとなった。それは、ブレハーノフおよびかれを師とするロシアのマルクス青年たちの飢饉に対する態度が、ミハイロフスキーの眼には、我慢ならぬものに映ったからである。マルクス主義者たち（かれらは飢饉の当時はまだごく少数だったのだが）は、飢饉に苦しむ人民に対する人間的同情を欠いており、飢饉をば農民のプロレタリア化という必然的過程の促進物としてだけ、客観主義的、傍観者的に説明している、とかれには見えた<sup>10)</sup>。そしてかれは、このような人間不在の客観的必然論はマルクスの史的唯物論の帰結であり、マルクスの史的唯物論そのものはヘーゲル哲学に根源をもつと考え、マルクスにおけるヘーゲル的なものの摘発を中心として、唯物史観の批判をはじめたのである。「ヘーゲル哲学においては個人は不可避的な歴史の過程によってもてあそばれる力なき断片にすぎない」<sup>11)</sup> マルクス主義者はそれを継承して「人間をば、歴史的必然性という、ひそかな、眼にみえぬ、内的な法則によってあやつられる人形」<sup>12)</sup>

10) ミハイロフスキーが飢饉に対するマルクス主義者の態度として引用したのはオレンブルクのマルクス主義者グループの文書であった。Cf. Billington, *op. cit.*, p. 166. しかしかれはブレハーノフの飢饉論をも知っていたはずである。ミハイロフスキーの編集する「ルースコエ・ボガットヴォ」誌がマルクス批判の開始を告げたのは1893年10月号である。

11) "Русское богатство", Oct. 1894, стр. 55, A. P. Mendel, "N. K. Mikhailovskij and his Criticism of Russian Marxism", A. S. E. E. R., Vol. XIV, No. 3, 1955, p. 335. から引用。

12) *Ibid.*, p. 338.



としてとらえている、とかれはいう。

もちろんミハイロフスキーはもともとマルクス理論と肌の合うひとではなかった。ブルードン、ルイ・ブランなどの反権力的、個人主義的、倫理主義的なフランス社会主義思想に親しんだかれは、ビスマルクとドイツ哲学とイギリスの経済学を嫌っていた。かれは個人の全人的発達が窮極の価値であることをくりかえし主張したが、そのさい、分業が個人の全人的発達の最大の敵であるとして分業の進展に反対し、素朴な生活を唱えている。そこにかれの思想の主観的理想主義とロマン主義的性格がはっきりとあらわれている<sup>13)</sup>。

ミハイロフスキーのマルクス批判は、レーニン「人民の友とは何か。第1分冊」(非合法文書、1894年4月脱稿)、ストルーヴェ「ロシアの経済的發展の問題にたいする批判的覚え書」(合法出版、序文=1894年6月)、プレハーノフ「歴史に対する一元論的見解の發展の問題によせて」(合法出版、1895年1月刊行、邦訳「史的一元論」)の反批判をよびおこした。ミハイロフスキーがロシア・マルクス主義者と名付けているもののなかには、マルクス主義者と合法マルクス主義者とが一括されてふくまれていたのであるが、あたかもそれに対応して、マルクス主義者と合法マルクス主義者は、ミハイロフスキーおよびかれに追いつくナロードニキのマルクス批判に対する反批判、すなわち史的唯物論を中心とするマルクス理論の正当性の主張においては、同一陣営を形成し

- 13) ミハイロフスキーは26歳のときの論文「進歩とはなにか。ハーバート・スペンサー氏の思想の検討」(1869)において、生物学的な社会有機体説をしりぞけて、分業によって損われることのない、個人としての人間の円満な発達(かれのいう *цельная личность*)を歴史の目標としてかかげた。F. B. Randall, "N. K. Mikhailovskii's 'What is Progress'", *Essays in Russian and Soviet History*, ed. by J. S. Curtiss, 1963, pp. 48-62. ミハイロフスキーについてのわたくしの知識は主として上記の Billington, Mendel, Randall の3人の研究に拠っている。ミハイロフスキーの史的唯物論の理解が相当に粗雑なものであったことは、プレハーノフやレーニンの諸論稿によって知られるが、しかしかれの主張は史的唯物論に対して提起されうる根本問題にかかわっていた。史観論争においてミハイロフスキーを批判したストルーヴェ、トゥガンら合法マルクス主義者は、90年代末には新カント派哲学にもとづいて、史的唯物論を批判するようになったが、そのさいかれらが史的唯物論批判の中心にすえた意志の自由、人格の価値などの問題は、表現形態にちがいはあっても、かつてミハイロフスキーが提起したところのものである。Vgl. P. Struve, "Die Marxsche Theorie der sozialen Entwicklung", *Braun's Archiv*, Bd. XIV, SS. 658-704. マルクス主義の立場においてそうしるものをどのように理解すべきかが、戦後の主体性論争の1論点であったことは知られている。

た。ただし、ストルーヴェの非マルクス主義性をしつように追求したレーニンの労作<sup>14)</sup>がしめすように、史的唯物論のつかみ方においても、レーニンとストルーヴェとのあいだには異質なものがあり、レーニンは合法マルクス主義批判の視角をあきらかに自覚しつつ、合法マルクス主義者とナロードニキ批判の共同戦線を張ったのである。

史的唯物論を中心とする論争におけるマルクス側の総帥はもちろんプレハノフであって、「史的・一元論」から「歴史における個人の役割」(1898)にいたるかれの諸論稿は、哲学史についての該博な知識を駆使して、史的唯物論を近代西欧哲学の嫡出子、必然的帰結として位置づけ、史的唯物論の正当性の論証に力をそそいでいる。「批判的に思考する個人」「社会学における主観的方法」などの言葉に集約されるミハイロフスキー流の主観主義が批判の対象であるため、そしてまたプレハノフの思想的資質そのものからして、それらの論稿においては、史的唯物論が本来そなえている客観主義的性格がとくに強調されている<sup>15)</sup>。歴史の客観的合法則性の主張は、歴史の法則そのものが社会主義の終局的勝利を保証しているという思想、ロシアにおける資本主義の発展の基

14) レーニン、ナロードニキ主義の経済学的内容とストルーヴェ氏の著書におけるその批判(ブルジョワ文献におけるマルクス主義の反映)、1894、「レーニン全集」第1巻。これはストルーヴェ「ロシアの……批判的覚え書」1894、に対する批判であるが、副題としてつけられている「ブルジョワ文献におけるマルクス主義の反映」というのは、ストルーヴェがブレンターノおよびブレンターノ派に対して使った言葉を、レーニングがストルーヴェ自身の特徴づけに転用したものであるらしい。Cf. R. Kindersley, *The First Russian Revisionists*, 1962, p. 129. ちなみに、「経済学的ロマン主義者」という言葉もレーニンよりもさきにストルーヴェが使用しているのがみられる。См. П. Струве, Критические заметки к вопросу об экономическом развитии России, 1894, стр. 129. レーニンが「経済学的ロマン主義」についてはストルーヴェと同じ意味でナロードニキ批判に用い、「ブルジョワ文献におけるマルクス主義の反映」をストルーヴェ自身につきつけているところに、レーニンとストルーヴェの共同および対立が象徴されている。ストルーヴェは、史的唯物論に対しても、従来のすべての歴史理論のなかでもっともすぐれたものとしつつも、「なお哲学的基礎づけを欠いている」(Струве, указ. соч., стр. 46)とするなど、つねにある種の留保をつけている。

15) プレハノフの史的唯物論関係論稿については別篇で論ずる機会があるはずである。なお、史観論争への参加者はミハイロフスキー(広義のナロードニキ)派にダニエリソン、ヴォロソフ、カレーエフなど、合法マルクス主義者にストルーヴェ、トゥガン、ブルガコフなど、マルクス主義者にプレハノフ、レーニン、ポトレンソフがいた。史観論争はプレハノフ「歴史における個人の役割」(1898)に対してミハイロフスキー側からものはや反論がなかったため、それをもって終結したとみてよい。史観論争の終結とほとんど踵を接して1899年に、今度は合法マルクス主義者の史的唯物論批判が国際的な規模での修正主義論争の一翼を形成しつつ開始される。注13) 参照。

盤にたつ社会主義だけが未来をもつという思想につながる。それに対して主観主義の主張は、歴史過程が個人（エリート）の力によって転轍できるという思想、したがってロシアの資本主義化を決定的な動かすことのできない現実とはみない思想と適合的に連関する。その意味において、史観を中心とする主観主義対客観主義の論争は、狭義のロシア資本主義論争の基礎あるいはそとわくをなし、ひろい意味でのロシア資本主義論争は、史観を中心とする哲学論争をも一環としてふくむものとして考えられるのである。

### Ⅲ 飢饉論における3つの立場

つぎに90年代ロシアの3つの批判的在野思想の飢饉論とその相互の関係を述べよう。

ナロードニキの飢饉論はダニエリソン Н. Даниельсон (1848-1918, 筆名ニコライ・オン) によって代表されている。かれの主著「改革後のわが国の社会経済概要」《Очерки нашего пореформенного общественного хозяйства, 1893》の仏訳本の序文にはつぎのように書かれている。

「1861年の農奴解放以後の、ロシアの経済発展の歴史をあつかう第1部は、1870-80年の期間において、しばしば飢饉をまねくまでにいたった農民経営の衰退の印象のもとで書かれた。この第1部において著者は、経済生活の種々の事実を整理して、農民経営のこの凋落の原因はなにであるかという問題に答え、また農民経営の凋落へと導いたメカニズムの運動をしめそうとつとめた。

その10年の後、農民大衆の経済水準はいっそう低下し、農民人口の貧困化にもとづく経済的条件の総体は、かつてはロシアのその他の地方すべてに対してだけでなく、ヨーロッパに対する穀倉でもあった広い地帯が飢饉の恐怖のどん底につきおとされるという事態をまねくまでにたちいたった。この著作の第2部は、農民が1891年および92年に受けた、あの強烈な危機の印象のもとで書か

れた」<sup>16)</sup>と。

一読して知られるように、飢饉はダニエリソンの労作のモチーフであるといっても過言ではない。かれの飢饉論はかんたんにいえばこうである。飢饉の直接の原因は農民経営の疲弊であるが、農民経営疲弊の原因は資本主義であるから、ロシアの資本主義化こそが飢饉の真の原因である、と。「……このように急速な資本主義の発展、われわれがみたように、人民の生産と消費を犠牲としてうみ出された発展の結果として、1891年にわれわれが目撃した人民の災害が突発した」「人民の需要の発展が低く、むしろつねに減少しつつある国、科学の発展をおろそかにし、農業技術の初歩しか知らぬ国、工業の発展が生産手段と生産者とのたえざる分離、しかも分離の人工的な加速を、浮浪者の大軍の人工的創出を基礎としており、そうしてつくり出された浮浪者の大軍が全国をさまよい、仕事を見つけようとしているが雇い口のないような国、そのような国における資本主義的生産はどのような結果にいたりつくかを、1891年の災害はしめした」<sup>17)</sup>。

飢饉の原因がそうであるとすれば、飢饉の再発をふせぐべき方策はおのずからあきらかである。ダニエリソンは当面の政策として、農民所有地の増大、農民のための信用制度の拡充、農民の租税負担の軽減をにかけている。しかし根本的な解決は、当局が資本主義化政策が誤りであったことを自覚して、「人民の生産」の擁護へと180度の政策転換をおこなうことである。租税制度の根本的改訂にしても、資本主義化政策が継続されるかぎりには期待できない、とダニエリソンは考える<sup>18)</sup>。

つぎに合法マルクス主義の飢饉論を代表するストルーヴェの説を聞こう。かれは飢饉におそわれた地方において家畜が弊死し、自立的経営力をもつ農民がいっそう減少し、土地の借手が減るために借地料が下落し、出稼ぎが激増して

16) Nicolas-on, *Histoire du développement économique de la Russie depuis l'affranchissement des serfs*, 1902, p. v. 以下この仏訳本に拠る。

17) *Ibid.*, pp. 385-86. その他 p. 343 f., 403, 463 など多くの個所で飢饉を論じている。

18) *Ibid.*, pp. 343-65. その行論中には、間接税中心主義を資本主義と不可分とするような素朴な謬論がふくまれている。

いることを述べたのち、つぎのようにいう。「現在のロシアの資本をもたぬ、労働だけを基礎にしている農民経営は商品生産に耐えてゆくことができないから没落するであろうこと、いな没落せざるをえないこと、このことに疑いの余地はない」たしかに「飢饉は弱い農民の生産力を破壊する。」<sup>19)</sup>しかし大局的にみるならば、商品生産の環境において貧農は飢饉がなくても没落（プロレタリア化）するほかないのであって、飢饉はその過程を促進し、劇的な形態を与えるにすぎないのである。

では飢饉の原因はなにか。ストルーヴェもダニエリソンと同じように、飢饉の直接の原因は広汎な農民経営の力のよわぎにあるとするが、その原因のもとづくところ、すなわち根本原因については、ダニエリソンが資本主義化と答えたのとはまったく反対に、資本主義化の不足、ヨリ具体的には農業における資本主義化のおくれである、という。ストルーヴェは、鉄道・信用制度などを先導とする工業の資本主義化が農民経済を破滅させるというダニエリソンの（かれだけでなくナロードニキに共通な）見解を誤りであるとしてしりぞける。ストルーヴェによれば、「一般に交換経済が農民的農業を零落させる（これはもちろん、一般的定式としては正しくないのであるが）ということができるにしても、その役割を演じるのは工業資本主義ではなくて、農民的農業が商品流通のなかにひきいれられることである。」<sup>20)</sup>農民が商品流通のなかにひきいれられると農民層一般の零落ではなくて農民層の分化がおこる。だがこれは工業資本主義のせいではない。「紡績の原料の農民的生産の減少が、資本主義的綿工業の生産と消費の増加をもたらしたのであって、その逆ではない」<sup>21)</sup>ストルーヴェによれば問題の核心は工業資本主義による農民経営の収奪ではなくて、農

19) P. Struve, "Die Bauernpacht in Rußland", *Sozialpolitisches Zentralblatt*, II. Jg., Okt. 1892, S. 4. ストルーヴェはとくに家畜の斃死によって多数の農民が経営能力を喪ったことを強調し、飢饉地帯においてはそのために出稼ぎがふえ、借地料が下落したと述べている。Vgl. *ditto*, "Zur Sozialpolitik der Mißernten in Rußland", *op. cit.*, II. Apr. 1893, SS. 320-21. ストルーヴェは1892—94年に同誌に7篇の小論を寄稿している。

20) П. Струве, Критические заметки к вопросу об экономическом развитии России, 1894, стр. 245-46.

21) Там же, стр. 227.

民経営がいまだ商品経済に適応できるような形態に発展していないことにある。

「飢饉のまえの平等」をひきおこす農業生産力のひくさこそが問題である。

農業生産力の向上は、遠い将来は別として現在のロシアにおいては農業の資本主義化によって果されるほかに道はない。「資本主義的農業への移行こそ、周期的にくりかえされる飢饉をおこらないようにし、農業生産と工業生産とのあいだの均衡に漸時的に到達するただひとつの手段である」<sup>22)</sup> ただしかれのいう「資本主義的農業」は、近代的3階級分化にもとづく農業経営あるいはエンカー経営だけでなく、「西欧的意味での農民経営」、具体的には大農あるいは富農もふくめて考えられており、むしろ望まれているのはそれである。「わたくしの個人的な同情は、経済的につよい、商品生産に適合した農民の側にあるのではけっしてない。しかしわたくしはこのような農民の創設をめざす政策を、合理的で進歩的なただひとつの政策とみないわけにはいかない。なぜならば、そのような政策が資本主義発展の歴史的・不可避的過程に適合していて、同時にその過程の苦しみをやわらげるからである」<sup>23)</sup>と。

ダニエリソンが当面の対策として提起した前述の諸政策（農民所有地の拡大、農民のための信用制度の拡充等）については、ストルーヴェもそれを支持する。しかしダニエリソンがそれらの政策を非資本主義化政策への過渡あるいは第1歩として提起したのとは異って、ストルーヴェはそれらの政策がまさにかれの意図する「農業の資本主義化」を促進すると思われるから支持するのである<sup>24)</sup>。だから同一の政策に対して両者が読みこんでいる意味はまったく反対であった。

飢饉の原因は資本主義化であり、ロシアを救う道は非資本主義化であるという説と、飢饉の原因は資本主義発展のよわさであり、ロシアは資本主義の合理的発展によってのみ救われるという説とが、平和共存することはできない。ストルーヴェは1892年以降、飢饉論をもふくめて、農業問題について多数の論稿

22) P. Struve, "Die wirtschaftliche Entwicklung Rußlands und die Erhaltung des Bauernstandes", *Sozialpolitisches Zentralblatt*, Jg. I, Aug. 1892, S. 417.

23) П. Струве, Критические заметки..., 1894, стр. 281.

24) Vgl. P. Struve, "Zur Beurteilung der kapitalistischen Entwicklung Rußlands", *op. cit.*, III. Jg., Okt. 1893, S. 3.

を発表しているが、ダニエリソンの「改革後の……概要」が刊行されると、ただちに2つの書評を書いた。そのひとつにおいてかれは、当時ふつうにはマルクスのロシアにおける門下生とみられていたダニエリソンの書物が、実は「マルクス主義の胴体に空想主義の顔をつけたもの」<sup>25)</sup>であるとし、いまひとつの書評においてはダニエリソンの書物を、ナロードニキ的社会思想とマルクス理論とを統合しようとする方向の「臨終の白鳥の歌」であるとし、ロシアの現在の歴史的位罫についてのストルーヴェ自身の見解を「われわれは資本主義の崩壊の前に立っているのではなくて、資本主義の産みの苦しみのただなかにいるのだ」<sup>26)</sup>と要約している。

ナロードニキももちろん黙ってはいなかった。ダニエリソンの「改革後の……概要」に対するストルーヴェの批判に対してはユジャコフが反批判を書いた<sup>27)</sup>。ストルーヴェ自身は自己の見解を「ロシアの経済的發展の問題に対する批判的覚え書」(1894)にまとめた。この労作は、前節で史観論争に関して名をあげておいたことから知られるように、史観論争とロシア資本主義論争とを兼ねあわせており、全体の半分強は史的唯物論の擁護とナロードニキ思想の批判にあてられ、それを前提としてロシア資本主義論が、これまたナロードニキのロシア資本主義論に対する論争的スタイルで展開されている<sup>28)</sup>。「ロシアの……批判的覚え書」はその内容において合法マルクス主義の劃期的労作であり、またマルクス系理論の合法的出版の扉を開いた点でも大きな意味をもったので

25) その書評のひとつは注 24) の論稿である。Ibid., S. 2.

26) P. Struve, "Nikolai-on, Studien über unsere Volkswirtschaft nach der Bauernemanzipation, 1893, (in russischer Sprache)", *Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik*, Bd. VII, 1894, S. 355. ダニエリソンはエンゲルスの支持を期待したが、かれの予期に反してエンゲルスはいずれかといえばストルーヴェの肩をもつ返信を書いた。エンゲルスのダニエリソンあて書簡, 1893年10月7日; 「マルクス・エンゲルス選集」第13巻, 246—49ページを参照。

27) С. Н. Южаков, "Вопросы экономического развития России", Русское богатство, No. 11, 12, 1893. 筆者末見。

28) この書物の構成は 1. ナロードニキ主義の社会学的理念の特徴づけ, 2. 史的・経済的唯物論, 3. 経済生活の史的発展の特徴づけ, 4. 経済的進歩と社会的進歩, 5. 経済的世界観としてのナロードニキ主義, 6. ロシアの経済的發展に関する問題について, となっている。紙量からすれば 6. が全体の 3分の1強を占めている。

あるが、出版とともに大きな反響をよんだこの書に対してナロードニキのがわからは、史観の問題に関してはミハイロフスキーが、経済の問題に関してはダニエリソンがただちに批判をくわえた<sup>29)</sup>。このようにして、飢饉論争はダニエリソンとストルーヴェを対立する軸としてロシア資本主義論争へと発展していった。もうすこし正確にいうならば、飢饉論争それ自体が時事論におけるロシア資本主義論争であった。そしてロシア資本主義に関するそれぞれの体系的分析は、1部は直接に飢饉論と結びついてあらわれ（ダニエリソンのばあい）、他は飢饉論争が鎮静したのち、ヴィッテ体制下における急速な工業化を背景として出来上った（トッガン「過去および現在におけるロシアの工場」1898、レーニン「発展」1899、など）が、そのばあいにおいても、例外はあるが概していえば、飢饉論にしめされたそれぞれの思想が、それぞれの体系的なロシア資本主義分析を貫徹しているのである。

だが先走ることをやめて議論をひきもどそう。いま述べた飢饉論としてのロシア資本主義論争は、ロシアの合法的出版物を主たる舞台とし、ドイツの雑誌を補助舞台としていた。それはナロードニキ理論対マルクス理論の対立としてあらわれたが、そのさいのマルクス理論の代表者は合法マルクス主義者であって、マルクス主義者は1894年以前には合法出版の便をえていなかった。しかしマルクス主義の飢饉論として、前節で指摘したように、合法出版物上での飢饉論争とは別に、ブレハーノフの2つの非合法論稿がある<sup>30)</sup>。その要点をみておこう。

ブレハーノフは飢饉の打撃をうけるのは飢饉地帯の農民だけでなく、全ロシアの人民であることを強調する。とくに都市プロレタリアートは食糧の不足と騰貴に苦しむだけでない。飢饉による農民の購買力低下は、国内市場に主とし

29) Н. К. Михайловский, "Литература и жизнь", Русское богатство, No. 10, 1894, Н. Даниельсон, "Нечто об условиях нашего хозяйственного развития", там же, No. 4, 6, 1894. ともに筆者未見。

30) 「全ロシアの破産」1892年1月執筆、は「労働解放」団刊行の文学・政治評論誌《Социал-демократ》，кн. IV に収められ、「ロシアにおける飢饉との闘争における社会民主主義者の任務」1892は同団刊行の「現代社会主義叢書」第10冊として刊行。それぞれ Г. В. Плеханов, Соч. III, стр. 313-57, 358-424. におさめられている。



て依拠する工業製品の販路を縮小させ、そのため企業は破産し、労働者が解雇され、あるいは賃金を切下げられている。ブレハーノフはプロレタリア社会主義の理論家にふさわしく、このように飢饉の都市プロレタリアートに対する意義から説きはじめ、飢饉が全ロシア経済の再生産過程をマヒせしめる危険をもって迫っていることを強調する<sup>31)</sup>。これはブレハーノフの飢饉論のひとつの特徴である。

つぎに飢饉の原因について。ブレハーノフが飢饉の直接の原因は農民経営の疲弊であるとしている点では、ダニエリソン、ストルーヴェと異ならない。その点に関してはブレハーノフが、多数農家がもはや家畜を失っているために施肥が不足し、表土が涸れていること、したがって深耕の必要があるのに深耕用の犁ももっていない事実を、とくに強調していることだけを言い添えておこう<sup>32)</sup>。しかし、農民経営をそのような状態におとし入れた原因、すなわち飢饉の根本原因の段になると、ブレハーノフの論述はダニエリソンともストルーヴェともちがっている。さきにみたようにダニエリソンは、飢饉の根本原因を資本主義化にあるとし、ストルーヴェは資本主義化の不足にあるとしたのであるが、ブレハーノフはツァーリズムが飢饉の根本原因であると主張する。かれの議論はこうである。たしかに商品経済化の過程は農民層を分解し、農民層のなかの多数のものを貧農化、半プロレタリア化する。それに対して、農民から収入以上のものまで収奪している重税は、農民全体をそれだけ貧困化させている。言葉を補っていうならば、そのために農民層分解はひどい経済的レヴェルにおいて進行している。過去20年のあいだに、「農民経済はますます零落したため、耕

31) 「わが国の大工業も小工業も現在までなお主として国内の販路によってささえられている。飢饉のない半飢饉的な農民の購買力がどのようなものでありうるかを読者は了解されるであろう」Г. В. Плеханов, Соч. III, стр. 317. ついでかれは、飢饉対策における当局の無能ぶりと、飢饉を利用してひともうけしているブルジョワの活躍を伝えている。См., там же, стр. 318—27.

32) ブレハーノフは、ヴォルガ河流域における1880—90年の11年間の作例表をかかげ、そのうち7年が不作であること、したがって気象条件の例外的にわるい年だけでなく平均的な気象条件のばあいには不作になるようになっていと述べ、「原因は地上に、ロシアの社会関係のなかにある」(Там же, стр. 343) という。

作方法は改良されるどころか、むしろたえず悪化した」というような状態の原因は、「農民の奴隷化のみなもとであるロシアの租税制度」<sup>33)</sup>である。しかるに、農民に重荷をおわせている租税制度はツァーリズムと不可分であるから、結局ツァーリズム体制が飢饉の原因だ、ということになる。

それではどうすべきであるか。ブレハーノフは、(1) 農民および労働者に対する十分な救援資金の付与、(2) 農民経営の再建のための補助金の支出、(3) 農民に巨大な負担をおわせている租税制度の徹底的改訂、の3項目を当面の要求としてかかげている<sup>34)</sup>が、それら3つの項目の完全な実現（とくに(3)）をツァーリズムに期待することはできず、国民の代表者会議たるゼムスキー・ソボールの召集によって、その手ではじめて実現されるであろう、という。ブレハーノフは3部会の召集がフランス大革命の序曲となったことを念頭におき、ゼムスキー・ソボールがツァーリズムを倒す憲法制定議会となることを予想している。資本主義化を飢饉の原因とみるダニエリソンが非資本主義化政策への転換を提起し、資本主義化の不足を飢饉の原因とみるストルーヴェが農業の資本主義化政策を提案したのに対して、ツァーリズムを飢饉の原因とするブレハーノフは、ツァーリズムの打倒を実践的帰結とした。「わが国の完全な経済的破産は、わが国の完全な政治的解放によってしか阻止できない」「飢饉との闘い

33) Там же, стр. 344, 354. ブレハーノフは、農民解放後における前資本主義的残基の中核は国家(ツァーリズム)と農民との関係にあるとしている。Там же, стр. 349 f. この点はブレハーノフの東洋的デスポチズム論の視点からするロシア社会把握の重要論点であって、注3)でしめた構成の第3部において詳論する予定である。さしあたり注3)にあげた拙稿「ロシア資本主義論の展開」第3節を参照。

34) Там же, стр. 356-57. ブレハーノフは飢饉に関する第2論稿においては、「農村プロレタリアートは都市プロレタリアートの自然的同盟者」であるとし、「大土地所有者の完全な収奪とその所有地の国有への移管」(Там же, стр. 415)をスローガンとしてかかげよ、といっている。ブレハーノフは「われわれの相違」(1885)の分析を想起して、「農民経営がいくらかでもよい条件にあるところほど、共同体はいっそうすみやかに解体する」(Там же, стр. 424. 拙稿、ブレハーノフのロシア資本主義論(3) 6節を参照)から、大地土地の没収、共同体農民へのその分配は、農民層分解を促進するという。ここにはレーニンがのちに展開する「2つの道の理論」のエレメントがある。ブレハーノフは、社会民主主義者はブルジョワジーの政策論のギマン性を暴露して、プロレタリアートの側へ農民をひきよせるべきであるともいっている。しかしそれでもやはりレーニンと異るのは、農民は農民としては本質的に保守的であるところにある。また、共同体農民への土地の分配によって、分割地的所有を構想していたのである。

はツァーリズムとの闘いでなければならない」<sup>35)</sup>と。

ナロードニキ、合法マルクス主義、マルクス主義のそれぞれの飢饉論の方向はこのようであった。

#### IV 思想と経済学——「資本論」支配の意味

飢饉の爪痕はふかかったが、ブレハーノフが期待した社会的激動はついにおこらず、農民はしずかに耐えた。飢饉は農業と農民問題を焦点たらしめたが、飢饉が収束されたあとは、急速な工業化とそれにともなう諸問題とりわけ労働者運動を前面におし出した。ナロードニキ、合法マルクス主義、マルクス主義が、ヴィッテ体制に対して、またこの時期にそれら相互に対してとった姿勢は、飢饉論について述べたところから、ほぼ推察できるであろうが、かんたんにまとめればつぎのようであった。

ナロードニキは、かれらが飢饉の原因は資本主義化政策であると説いたにもかかわらず、飢饉の後に資本主義化政策にいつその拍車がかけられるのを見て、怒りかつ失望した。かれらはヴィッテとそのブレインたるメンデレーエフを嫌った。かれらはマルクス主義者（マルクス主義者と合法マルクス主義者）を、資本主義化を歓迎する点でブルジョワと同じだと非難した<sup>36)</sup>。かれらは資本主義化を憎悪したけれども、しかしかれらは全体としてはツァーリズムに政

35) Там же, стр. 359. ダニエリソン, ストルーヴェ, ブレハーノフのそれぞれが、飢饉の「根本原因」とするものは、それぞれの論者の実践的・政策論的志向にふかく関連してきめられている。いずれも、論者がその除去ないしは変更を意欲するところのものが「根本原因」となっている。純客観的にみるかぎり、地理的、自然的条件をはじめとしてほとんど無限の因果連鎖が認められるのであるが。  
なおエンゲルスが“Der Sozialismus in Deutschland,” *Neue Zeit*, Jg. X, 1891 においてロシアの91年飢饉について論じているが、かれの主要論点は、飢饉のおかげでロシアが戦争をはじめの危険が当分なくなったこと、飢饉によってブルジョワジーの手への土地集中が促進されるだろうという2点である。「マルクス・エンゲルス選集」第17巻、412—17ページ。かれは飢饉をロシアのそとから、ドイツ社会民主党の勝利の条件の視点から見ている。

36) ヴォロンツォフはヴィッテを「祖国に対する責任感のかけらもない成り上り者の冒険主義者」と罵った。В. Воронцов, Судьба капиталистической России, 1907, стр. 103. ダニエリソンはメンデレーエフを資本主義化のイデオログとして批判した。Nicolas-on, *Histoire du...*, 1902, p. 335, 404. マルクス主義者＝ブルジョワというナロードニキの定式については、J. H. Billington, *op. cit.*, pp. 165-66.

策転換を求める体制内の改良主義の立場であった。

ナロードニキの政策論は、当面の要求としてはひとつは、鉄道建設・外資導入などの資本主義化政策の停止、いまひとつは、農民、クスターリ、アルテリに対する補助育成政策の主張である。当面の要求を越える、いわば最大限綱領はかならずしも明確ではない。ヴォロンゾフは土地と重工業の国有化を示唆しているが、全体としては共同体とアルテリを単位とする社会構造を表象し、ダニエリソンは将来の図についてはほとんど語らない。ユジャコフは「世界的な農業社会主義革命」<sup>37)</sup>という夢をえがいた。将来に対するナロードニキのイメージがひどくぼんやりし、あるいはその逆にひどく空想的に鮮明であるのは、かれらの衰勢をあらわしているといえようか。レーニンが後に、ナロードニキ主義を農民的土地革命の思想的被として再評価したことは知られているが、90年代合法ナロードニキの経済思想はそのなかには入らない、すくなくとも典型的なそれではない、と考えられる<sup>38)</sup>。

合法マルクス主義者も反ヴィッテであった。第1の理由は政治的なものである。合法マルクス主義者はなによりも憲法、西欧なみの政治的自由を欲したのに、ヴィッテはゼムストヴォ自由主義者をも敵にまわすほどの専制主義の信奉者であった。第2の理由は政策論についてである。合法マルクス主義者はロシアの資本主義化をすべての問題の解決の大前提と考えるのであるから、ヴィッテの政策はかれらの歓迎するところであったはずだ、と思われるかも知れない。すくなくともナロードニキはそう思った。たしかにそれを全面的に否定するに

37) T. H. Von Laue, "The Fate of Capitalism in Russia; Narodnik Version", A. S. E. E. R., Vol. XIII, No. 1, 1954, p. 25. ナロードニキの政策論は主としてこの論文に拠る。ユジャコフは後進国に可能な3つの道をあげている。(1)反近代化、これはシナが採ったところで破滅の道である。(2)イギリスをモデルとする近代化、日本・イタリアがその例で、資本主義の矛盾と後進性が重なりあう。(3)被搾取国と西欧プロレタリアートとの同盟による「世界的な農業社会主義革命」、ロシアがその頭首にたつべきである、とする。ユジャコフはナロードニキ経済学者のうちでもっとも攻撃的なナショナルリストであった。

38) レーニン、2つのユートピア、1912、「全集」第18巻、その他を参照。レーニンは「2つの道」の理論段階において、ナロードニキを再評価したが、それはエス・エル、トルドヴィキとして、農民のイデオログとして第1革命期に登場してくるものについてである。

は無理がある<sup>39)</sup>。しかし合法マルクス主義者は、ヴィッテ流の強引な工業化政策一辺倒ではなくて、農業政策や社会政策への配慮を十分にかねそなえた、いわば「合理的な」資本主義化を求めている。ストルーヴェが飢饉論において提起した「経済的に強力な農民層の創出」のための方策はヴィッテによっては打出されなかったし、ストルーヴェ、トゥガンらが熱心に望んだ工場法の改善についても、みるべき前進はなかった<sup>40)</sup>。その点でもかれらはヴィッテ批判者である。合法マルクス主義者は憲法の獲得（ブルジョワ革命）を欲する点で、マルクス主義と手をつなぐ。しかもかれらはこの時期においては、ロシアのブルジョワ革命の主力をプロレタリアートに見てさえいる<sup>41)</sup>。ロシアの資本主義化の確認を大前提とする点でも合法マルクス主義者とマルクス主義者は一致する。しかし、合法マルクス主義者が真に情熱をもつのはブルジョワ革命であって、社会主義ではなかった点で、かれらはマルクス主義者と異なる<sup>42)</sup>。かれらにおいては、資本主義の「合理的な」発展あるいは野蛮な資本主義から文明的な資本主義への発展が事実上の最終的基準である。そしてかれらは政策の在り方によって「資本主義の産みの苦しみ」がいちじるしく異なることを強調する点で、政策論的であり、そこにかれらがドイツ社会政策学派とくにその左派につながるゆえんがある。

マルクス主義者の立場については、以上の叙述で間接に述べられているし、

39) たとえばストルーヴェは「わが国の……批判的覚書」の草稿に、ヴィッテらの保護関税主義のロシア資本主義に対する積極的意義を認める句を書いていたのを、反体制共同戦線に対する配慮を重んずるボトレンソフの忠告によって消去したと、自伝で述べている。P. Struve, "My Contacts and Conflicts with Lenin", *op. cit.*, p. 586.

40) 工場法を導入したのはブングであった（1882, 1886年）が、ヴィッテの時代には、工場監査官が労働者保護よりも新技術の紹介を主とするように変質した。ただしヴィッテは1897年に11時間半法を立法化した。T. H. Von Laue, *Sergei Witte and the Industrialization of Russia*, pp. 21, 96-98. Vgl. Tugan-Baranowsky, *Geschichte der russischen Fabrik*, 1900, S. 473 ff., P. Struve, "Die Arbeitslohn und die Lebenshaltung der Fabrikarbeiter im Gouvernement Moskau", *Sozialpolitisches Zentralblatt*, Jg. III, 1894, SS. 234-35.

41) 田中真晴, 1890年代ロシア資本主義論争の特徴と背景, 第2節を参照。

42) ストルーヴェは「社会主義はわたくしにすこしも情熱をよびおこさなかった。わたくしが社会主義者になったのはたんに推論によってであり、社会主義が経済的發展の客観的過程の歴史的必然的帰結であるという結論に達したからに他ならない」と回顧している。P. Struve, "My Contacts and Conflicts with Lenin", *op. cit.*, p. 577.

知られているところでもあるから、くりかえさない。

以上、飢饉論とそれを補足するウィット論におけるそれぞれの思想動向をみたわれわれは、90年代のナロードニキ主義をロマン主義、合法マルクス主義を急進的なブルジョワ合理主義と規定して誤りないであろうことを知ったはずである。わたくしは旧稿において、90年代のナロードニキ主義、合法マルクス主義をそのようなものとして述べたが、そこでは十分な裏付けを欠いていた。いまはそれが補われた。

さてナロードニキ、合法マルクス主義、マルクス主義のそれぞれのロシア資本主義論の方向は知られたから、それらの方向がそれぞれどのようなロシア資本主義分析に体系化されたか、それぞれのロシア資本主義論の構造はどのようなものであるかの問題に進まねばならない。そのさいまずあきらかにしなければならないのは、それぞれの思想がどのような経済学を、どのような意味で採ったかということである。けだし、それぞれのロシア資本主義論の方向が体系的分析に結晶するためには、経済理論を媒介とする実証を必要としたし、またそれぞれがその過程で自己の経済理論を明確化したからである。

それぞれの思想がどのような経済学に拠ったかの点でまず目につくことは、「資本論」の支配ともいうべき事実である。ここでわれわれは前稿の末尾において述べた事実につきあたるわけであり、ロシアにおいては古典的な市民社会思想が根をおろすことなく、ファーリズム批判がいちはやく反資本主義の基調をもって展開され、それが資本主義批判の経済学としての「資本論」が迎えられる知的上壤を形づくっていたことは、そこで述べたからここではくりかえさない<sup>43)</sup>。マルクス主義が「資本論」に依拠したのは当然であるが、ナロードニキ主義や合法マルクス主義までもが「資本論」を採ったのは、どのような意味においてであったか。いま検討すべきはこのことである。

まずナロードニキから。ナロードニキが「資本論」を採ったというと、奇異に感じられるであろうが、事実であった。その意味はこうである。ひろい意味

43) 田中真晴、1890年代ロシアの経済思想の動向、第4節を参照。

でのナロードニキの思想的指導者ミハイロフスキーは、さきに述べたように、マルクス理論を史的唯物論と経済学とにわけて、批判の鋒先をもっぱら史的唯物論に向け、経済学（「資本論」）には敬意をはらった<sup>44)</sup>。マルクス理論をこのように歴史理論と経済理論とにひきはなして見るのは、ミハイロフスキーだけでなく、ナロードニキに共通な傾向であったようである。たとえばヴォロンツォフは歴史理論においてはミハイロフスキーに迫ずいたとみられる<sup>45)</sup>。ダニエリソンは史的唯物論を正面切って批判しなかったにしても、「改革後の概要」の基底にある史観は、史的唯物論ではないし、経済史観でもない。それは純粹の意志決定として考えられる政策が、歴史に対してもつ規定力を過大に評価する、ナロードニキ的史観であるといわねばならない。そのようにして、ナロードニキは史的唯物論を明示的または暗黙のうちにしりぞけて、「資本論」だけをとろうとした。そのばあい、ミハイロフスキーは自分では経済の分野には立ち入らなかったのであるから、「資本論」を資本主義批判の理論として認めれば足りたのに対して、経済専門のナロードニキはなんらかの意味で「資本論」をロシア経済の理解の基準として使用している。そのことはヴォロンツォフについても、ある程度に、そして混乱したかたちでみられるようであるが、もっともはっきりしているのは、「資本論」のロシア語訳者であり、マルクスの学問上の弟子をもって自任していたダニエリソンの「改革後の……概要」である<sup>46)</sup>。

しかしこのようにいえば、ただちにつぎのような反論が出てくるであろう。レーニンは「経済学的ロマン主義の特徴づけによせて」（1897）において、ナロードニキの経済学をシスモンディの系譜としてとらえているではないか、マ

44) 70年代に「資本論」が紹介されたとき、かれはジュロフスキーに対立して「資本論」を擁護した。「資本論」に対するかれの評価は90年代にも変らなかった、といわれている。Cf. A. P. Mendel, *op. cit.*, p. 334.

45) Г. В. Плеханов, Обоснование народничества в трудах г-на Воронцова (В. В.), 1986, Соч. IX, стр. 55-70 に拠る。

46) ヴォロンツォフについては、松岡保、ロシア資本主義没落論の経済理論的基礎、「人文学報」20号、1964年を参照。ダニエリソンの労作については次稿であきらかにする。

ルクスではなくしてシスモンディがかれらの拠る経済学ではなかったのか、と。それに対してはこう答えられねばならない。レーニンは上記の論文において、無名にちかいエルフーンなるナロードニキのシスモンディ論を手掛りにして、ダニエリソンなどの代表的なナロードニキ経済学者の理論的見解が、エルフーンと同じくまったくシスモンディ的であることを論じているのであるが、それはダニエリソンたちがシスモンディを典拠としているということではなくて、「資本論」を典拠にしているにもかかわらず、その理解の仕方がまさしくシスモンディ的であり、その意味でナロードニキ経済学はロマン主義経済学のロシア的亜種として経済学史的に位置づけられる、ということなのである<sup>47)</sup>。

すなわち90年代のナロードニキの経済学は、古典的な形態のロマン主義経済学ではない。そうではなくて、すくなくともナロードニキの代表的経済学者においては、ロマン主義経済学ではなくて「資本論」を主たる典拠としながら、それがロマン主義的方向にねじ曲げられて受けとられ、ロマン主義思想に適合的な理論に変質せしめられてゆくのである。

そうした過程の結果としてナロードニキの再生産論・市場理論が確定する。その内容はレーニンおよびローザによってわれわれに一応知られている。それはかんたんにいえば、小生産没落→国内市場縮小論と、資本主義内部における剰余価値実現不可能→外国市場必然論とから成る。実はそのような考えはロシア資本主義没落論の先駆的（にして同時に古典的）労作「ロシアにおける資本主義の運命」（1882）においてすでにあらわれていた<sup>48)</sup>のが、90年代にヴォンツォフおよびダニエリソンによって、いっそうはっきりした形に整えられたのである。たしかに再生産論・市場理論はロシア資本主義論争の経済理論的なめである。しかしながら、それはレーニンとローザによって知られている。

47) ローザの見解もほぼ同じである。「ニコライ・オン（ダニエリソン）はかれのマルクスに精通しており、『資本論』の最初の2巻をたいへんよく利用したことは、みられるとおりである。しかもかれの全議論は純粋にシスモンディ的である。」（R. Luxemburg, *Die Akkumulation des Kapitals*, *Gesammelte Werke*, Bd. 6, 1923, SS. 216-17）、また彼女はナロードニキ経済理論を「シスモンディおよび一部はロートベルトッスの精神」（*Ibid.*, S. 206）ともいっている。

48) 田中真晴、ブレハーノフのロシア資本主義論、(2)、(3)を参照。



だからわたくしはそのことはなるべくかんたんにして、むしろかれらのロシア資本主義論の構造（再生産論・市場理論はその一軸心ではあるが、構造はそれだけではきまらない）について、「資本論」の偏ロマン主義的理解がどのようにみられるかを、次稿であきらかにしようと思う。

つぎに合法マルクス主義のばあい。合法マルクス主義者はナロードニキがマルクスの歴史理論を切り捨てるのとは異って、史的唯物論を経済史観の方向に解釈し、そのように解釈したマルクス歴史理論をナロードニキ批判の武器としたことはさきに述べた。合法マルクス主義者は、かえって経済学においてマルクスに留保をつけた。合法マルクス主義の代表的な経済理論家トゥガンーバラノフスキーは、処女論文「経済財の価値の原因としての限界効用に関する学説」<sup>49)</sup>において限界効用説に賛成し、その後、限界効用説と投下労働説との折衷を試み、さらにその後はいずれの価値学説も分配の法則を説明しえないとして、分配論における勢力説を展開するにいたるのであるが、要するに労働価値論に対しては、はじめから疑問を表明していたのである。ブルガコフも処女論文において、価値の生産価格への転形問題をとりあげて、そのマルクスの解法に疑問を表明した<sup>50)</sup>。トゥガンやブルガコフのそうした議論は、かれらが市民経済学の当時の前線に接触し、それを吸収したことによるのであるが、かれらはやはりドイツ語圏の経済学にもっとも親しかった。トゥガンはジュヴォンズやジュグラの仕事を利用しているが、価値論においてはもっぱらオーストリア学派の主張を取り入れようとしたのである。

価値論は合法マルクス主義者が「資本論」に付したひとつの限定であるが、合法マルクス主義者のなかでもストルーヴェはそれとは異って、リスト、ブレンターノ、シュルツェ・ゲーファニッツなど、歴史学派の生産力主義的ラインのひとつとを多く引用し、ある個所においては「マルクスとリストは、かれら

49) Туган-Барановский, "учение о предельной полезности хозяйственных благ как причине их ценности", «Юрид. вест.», No. 10, 1890. 筆者未見。S. Gringauz, *M. I. Tugan-Baranovsky und seine Stellung in der theoretischen Nationalökonomie*, 1928, S. 33 f., R. Kindersley, *op. cit.*, pp. 53-54, 154 f. に拠る。

50) Cf. R. Kindersley, *op. cit.*, p. 62.

の観点が異っているからこそ、相互に見事に補完しあっている」<sup>51)</sup>と書いている。また、トゥガンは価値論における限定づけとは別に、かれの名著「現代イギリスにおける産業恐慌。その原因と国民生活におよぼす影響」(1894)のドイツ語版序文に「この書物に展開されている販路と恐慌の理論は、著者の見解によれば、古典経済学とマルクスの「資本論」第2巻とを綜合することを目指している」<sup>52)</sup>と述べている。かれのいうところは具体的には、販路説による過少消費説の排除、拡大再生産の無矛盾の無限進行をしめす価格論の再生産表式の構成にもっとも端的に実行されている。

このように合法マルクス主義者は「資本論」一辺倒ではなかった。かれらはそれを他のものによって限定づけ、他のものによって補完し、また他のものと綜合しようとする。その「他のもの」とはオーストリア学派の価値論、歴史学派のなかの生産力主義的路線、古典学派(販路説)である。それらはブルジョワ合理主義に直接に適合的な経済学(とりわけ1890年代という時点と後進国という条件において)であった。

しかし合法マルクス主義はそうしたものをとりいれながらも、ことロシア資本主義分析に関するかぎり、主として拠ったのはやはり「資本論」であった。そのことはストルューヴェの「ロシアの……批判的覚書」についても、トゥガンの「過去および現在におけるロシアの工場」(1898)についても同じである。その具体的な内容は次稿にゆづるが、合法マルクス主義の「資本論」理解が偏ブルジョワ合理主義的傾向をもつことは、いま述べたところから容易に推測されるであろう。じじつ、「資本論」はナロードニキにとってはもっぱら資本主義崩壊の経済学であったのとはまったく逆に、合法マルクス主義者にとっては、資本主義の進歩性を確認する経済学であった。「資本論」はそのようなものと解され、そのようなものに剪りこまれることによって、ブルジョワ合理主義に適合的な経済学として使用されたのである。

51) П. Струве, Критические заметки..., 1894, стр. 182.

52) Tugan-Baranowsky, *Studien zur Theorie und Geschichte der Handelskrisen in England*, 1901, S. IV.

最後にマルクス主義者の「資本論」理解は、ナロードニキのそれとも合法マルクス主義者のそれとも、もちろんちがっていた。エンゲルスの表現を借りるならば「マルクスの経済・歴史理論を公然と二心なしにうけいれた」<sup>53)</sup> ロシア・マルクス主義者たちは、「資本論」を、そしてもっぱら「資本論」だけを経済学の信頼しうる典拠とした。

ナロードニキ、合法マルクス主義者、マルクス主義者は、ほぼ以上に述べたような経済学の装備および経済学の理解をもって、それぞれのロシア資本主義分析の体系を構築していった。それぞれのロシア資本主義分析の構造そのもの、それら相互の対抗関係と問題点の所在の研究は次稿の課題である。

[本稿は昭和39年度文部省科学研究費（各個研究）による研究成果の一部である]

---

53) エンゲルスのザスーリツチあて書簡、1885年4月23日付。これはブレハーノフ「われわれの相違」の寄贈に対する返書である。「マルクス・エンゲルス選集」第13巻、250ページ。